ノート

『事務事業一件　長門峡保勝会』における長門峡の観光振興策について

山口県立大学　非常勤講師　上　利　英　之

一　はじめに

現在多くの人々に知られ、紅葉の時期になると多くの観光客が訪れる長門峡。この長門峡は国指定名勝として、大正十二年（一九二三）に指定されている。この名勝として指定されるまでの経緯や開発などは、萩出身の日本画家、地質学者である高島得三（号・北海）や同じく萩出身の軍人、山根武亮らが中心となり、阿武郡長を務めた岡村勇二を会長とし長門峡保勝会が結成され、開発が行われたのは良く知られている。

二　本稿の主旨

長門峡開発の際、長門峡保勝会によって作成された事務関係書類が、現在萩博物館にて保存されている。正式な資料名は『事務事業一件　長門峡保勝会』であり、その内容の多くは長門峡の整備関係の事務手続きや、植栽、遊歩道整備などの事務書類だが、中には実際に長門峡を観光地化し、観光客を誘致するためにはどのようなことを行うべきか、を検討した書類も残されている。今回はその中でも筆者が興味を持った一つの書類を紹介する。

三　書類について

この書類は、「長門峡探勝要項　附　阿武川清遊」と題されており、整理の際に振られたであろう146という番号が、各紙ごとに書かれている。文末に書類の写真を掲載し、全文を掲載する。また、以降この書類を資料と呼ぶ。

四　この資料の概要

内容としては、長門峡を大きく五区と区外として分け、長門峡を探勝する際の旅程や、各区の見どころ、整備するべき注意点が記されている。この内容の骨子は、大正十一年（一九二二）五月に萩医師会会員である世良氏が、長門峡を探勝した後に長門峡保勝会に寄せられた意見が元となっている。以下原資料を翻刻し、カナをひらがなに句読点を加え、旧字を新字に直した文を掲載する。また改行や表現は、なるべく本来の改行を活かした状態にした。また、この翻刻には萩博物館学芸員の平岡崇氏にアドバイスを頂いた。

長門峡探勝要項　附　阿武川清遊

一、　探勝の便宜上、地区を左の五区に分つ
第一区　御堂原、丁字川より湯ノ瀬間（又は栃崎）
第二区　湯ノ瀬より江舟川、金郷渓を経て重塀岩間
第三区　重塀岩より高瀬（又は藤蔵間）
第四区　佐々並川（漣渓）長者原より藤蔵間
第五区　高瀬（又は藤蔵）より阿武川下り萩間

二、　全景を探勝せんとすれば、数日を要するも、普通三日間。
（もっとも時間に余裕なきものは、第一区を半日、第二、三区間を半日に探勝し得。）

第一日　御堂原丁字川より千瀑洞口に入り、順次下行し、支流生雲渓を探勝し、傾瓢又は握飯にて昼食。それより下りて龍宮淵附近を精探し、湯ノ瀬（又は栃崎）に着し、一浴労汗を流して、夕景を眺望しつゝ晩餐一泊。

第二日　早朝、支流江舟川に渡り、河床の広場において大小天狗岩、烏帽子岩及び金郷出合の遠景を眺め、上流の天壁岩、天柱岩、蟹瀬ノ瀑布を探り、次いで支流金郷渓に入り、猿渓瀑布より又下りて、切籠切窓の峻峰を

仰ぎつゝ昼食。（場合によりては、猿渓の滝又は重屏岩の下流広場なる河床にても可。）それより第三区に下り、展開せる両岸と広く、かつ円滑なる心地よき河床に川遊びをなし、夕景高瀬着（又は藤蔵）一泊。

第三日　支流漣渓に入り、清雅なる風景に浴し史跡、古蹟を探りつゝ藤蔵に帰着し、昼食。午后阿武川下り清遊に前日来徒歩探勝の労苦を慰しつゝ両岸の風景、史、古蹟を探りて萩町に着泊。（漣渓、探勝せざる者は高瀬より阿武川下りをなし、半日にして萩町着。）

萩にては神社仏閣、古史蹟、越ケ浜等を巡覧汽船にて青海島の勝景、次で美祢郡の洞窟を探り長門の三大奇勝を終覧。

第一区：峡谷の美
第二区：奇岩雄大
第三区：川遊の極致
第四区：清雅の風致
第五区：清遊慰労

長門峡宣伝歌

世界に誇る　勝景は
　日本一乃　長門峡
行った方がよい　見た方がよい
　　フレー〳〵〳〵

長門峡探勝阿武川の清遊についての希望

一、　探勝者に快感を覚えしめて、かつて倦怠の感なくして探勝遊覧せしむる事。

イ　関係地方民、特に旅館、茶屋及び之に準ずる者は精神上、物質上優遇しかつ便宜を与うる事。

ロ　倦怠を起さざる様、その道程の順序、設備及び地図、案内記等興味を感じつゝ探勝し得る様、方法を設くる事。

二、　地図を印刷物（これを仮に地図と名付く）と板図（これを仮に掲示図と名付く）とを分けて説明す。

イ　地図には山口県の大要（特に長門峡、青海島、滝穴の連絡、もっとも必要）と長門峡阿武川下り、並に萩地方一同の精巧図の事

ロ　掲示図は全景のものを長門峡駅、御堂原入口、聴秋橋、高瀬（又は藤蔵）、橋本橋、松本橋、汽船會社
　探勝上必要なる部分的のもの、丁字川、生雲渓、出合、龍宮淵、聴秋橋（此処に下流に長門峡の真景ある旨の掲示図、特に必要）、栃崎（比処に江舟川、蟹瀬の瀧、天柱岩、天壁岩等ある旨並に其出合の河床より大小天狗岩、烏帽子岩、金郷出合の遠景眺望絶佳の旨の記入）、金郷渓出合、重屏岩附近、山陽電気発電所附近、漣渓及び之に準すん必要の個所と建設する事

三、　現在の地図に添加したきもの

第一区中
1・雛の床、左岸の巨岩、其下手の巨岩に命名の事
2・桜の滝の記入、並悔不言の岩、並に生雲渓橋の記入

第二区中
1・聴秋橋、金郷出合の橋（今回架橋に決したるもの）
2・江舟川の勝景（小滝、天柱岩、天壁岩、蟹瀬の瀑布及び勝景に價するもの）
3・時雨山の割岩に命名の事
4・やぐら岩の記入誤正
5・切篭切窓下流数個の淵に命名の事

第三区中
1・重屏岩下流の両岸の河床、並に淵に命名の事（此地帯一般に対山展開河幅廣く、且同景平坦にし■第一、二区と比し危険なり閑かに散索して眞に川遊びの勝地たり）
2・日本橋梁会社出張所の下流左岸の天柱石柱岩（自然に石柱をなす）に命名の事
3・鰐岩附近の両岸の岩、並に山、河床、淵等に命名の事

４・高瀬乕蔵附近の勝地、史、古蹟を記入の事
第四区中
１・長者原、長者滝、淵及び下流の岩山、瀬、淵等に命名の事
２・漣渓第二魚切下流の巨岩、淵等に命名し、且史、古蹟記入の事
３・探勝に便なる様、道を布設する事
第五区中
１・阿武川下りの両岸の山、淵等之命名し、且、史、古蹟を記入の事
区外
萩附近の勝景、神社佛閣、史、古蹟等巡覧之便宜の様、記入の事
附記
１・道の分岐点之道標を建つる事
２・標木を整理する事
３・眺望の個所を明示する事
４・道と河床間の雑木、朽木の取捨を適当にする事
５・旅館（御堂原にも必要）、その他探勝上これに準する必要の設備
特筆すべきは第三区、第四区の勝景、並に史古蹟ヲ記載スル事（此三、四区を探勝するものは、充分なる記入なき為、倦怠の感、其声、其足とに表はる。故に此間、真に勝景の記入を要す。）
第三区河床の川遊び、阿武川下りの清遊は、長門峡探勝の労苦を慰し、かつ長門峡の単調ならざる真価を深く脳裡に印象す。世界的の勝地、日本一の勝景にして国立公園の候補地たる長門峡は永遠に保存したく、山陽電気の発電が将来この勝景を損せぬ様、一地方としてではなく、我日本国としても、之に向って保存に努力を要する事。
大正十一年五月、萩医師会員長門峡探勝をなしたる際、世良医師より長門峡開発に関し寄せられたるものなり。

五　資料の内容について

この資料を読むと、長門峡としている区域が、山口市側は丁字川からと、現在とは変わらないが、萩市側は今は阿武川ダムに沈んでしまったあたり（高瀬、藤蔵など）まで、かなり広い区域を想定していることがわかる。また、自家用車が一般的では無い時代であるため、五区間にわけ、三日をかけて全景を見ることを推奨しているが、時間がない場合の旅程も考慮されている。そして、それぞれの区間のテーマも設定されており、飽きずに景観を眺めて回れるように工夫されている。

また、現在より広く長門峡の範囲を捉えているため、近年の長門峡案内図ではその全容を掴みづらい。そこで当時に近い長門峡の案内図として参考になるであろうものとしては、この資料の少し後の大正十四年（一九二五）に出版された、吉田初三郎の『長門峡鳥瞰図』が各地名も入っていてよく分かる（図一）。この鳥瞰図と現在の地図を見比べると、資料に載っているが、現在は阿武川ダムに沈んでしまっている地名もわかりやすく（図二）、資料で設定された探勝ルートを確認するのにも、役に立つ。

また、現在では失われてしまったものとしては、金郷渓出合の橋がある。資料では「三、現在の地図に添加したきもの」の「第二区中」の中で「金郷出合の橋（今回架橋に決したるもの）」とあるものが、それに

（図1）吉田初三郎『長門峡鳥瞰図』長門峡管理組合　1925年
（国立国会図書館デジタルコレクションよりhttps://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/920244　2021年12月閲覧）

当たる。鳥瞰図の方ではすでに描かれており（図三）、金郷渓にはその橋を通って行くことができたと思われる。しかし現在の金郷渓出合付近には橋はなく、金郷渓にはボートなどの手段で川を渡る必要がある。因みに、近くには橋脚が川の中に立っている場所はある。これは長門峡に詳しい方の話によると、以前はそこに橋があり、それを通って金郷渓に行けたが、過去の洪水により、橋は橋脚を残して流されてしまい、以来掛け直しもされていないそうである。この流れてしまった橋が資料の中で「金郷出合の橋（今回架橋に決したるもの）」とされた橋だと思われる。

因みにその先の金郷渓は、金郷渓出合から少し奥に行ったところから、古いコンクリート製の遊歩道が整備された跡が続いており、渡ることさえできれば、猿渓瀑布やその奥に行くことはさほど難しくはないと思われる。おそらくそのコンクリート製の遊歩道は、古さなどから推測するに、大正年間に整備されたもので、この資料に設定された探勝ルートは、この道を通って行くことを想定されているのではないかと考える。

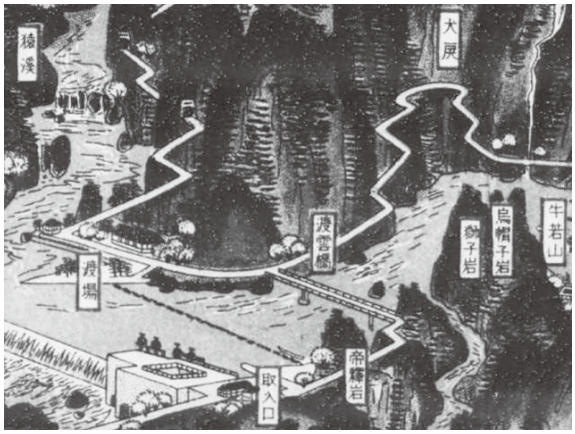
また、この資料の中で興味深いものとしては、「長門峡宣伝歌」である。正確な作者は不明で、メロディーもわからないが、このような歌が作られていた事自体が興味深い。

そして、強く印象に残ったものとしては、「関係地方民、特に旅館、茶屋及び之に準ずる者は精神上、物質上優遇しかつ便宜を与うる事。」とある一文である。昨今観光地振興や地方を盛り上げるなどの名目でイベントや祭りなどがよく開催されているが、多くの場合、開催者やその関係者が盛り上がり、地元は置いてきぼりで、後には結局何も残らない、といった事が見受けられ、地元が蔑ろにされている様にみえる。しかしながら長門峡保勝会では、外部の意見の採用であるかもしれないが、地元への配慮をするべきである、という、実際にどこまで実現されたかは不明ではあるが、少なくともこのような一文を公的文書に残すという意識は、称賛されることではないだろうか。

六　まとめ

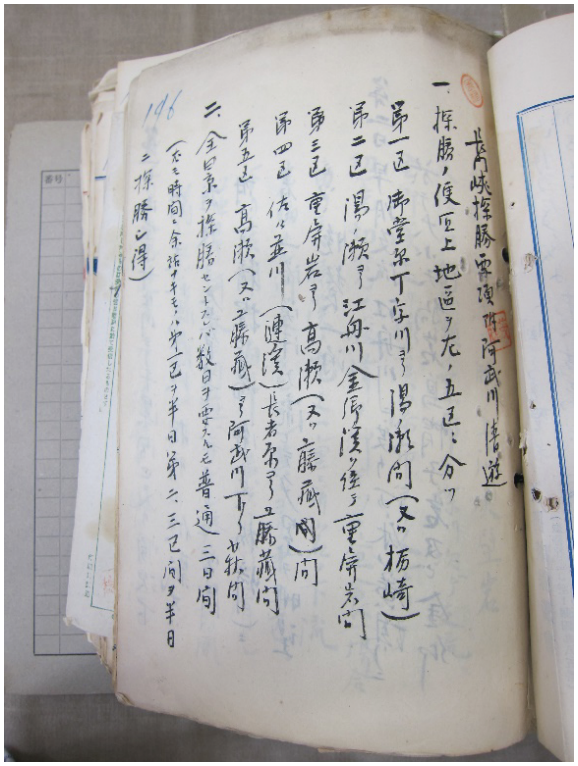
今回取り上げ、紹介した資料は、『事務事業一件　長門峡保勝会』の膨大な書類の一部である。大量にある書類だが、この資料群を読み、参考とすることにより、地元振興のイベントなどを意義のあるものにできるのでは無いかと思われる。また、何か興味深い資料が発見できれば紹介していきたい。

（図2）現在阿武川ダムに水没している地名
（©googlemapに筆者が加筆）



（図3）図1の拡大。現在無い橋が描かれている。

資料写真



青峨探勝案内　阿武川清遊

一、探勝ノ便宜上地區ヲ左ノ五區ニ分ツ

第一區　御堂原丁字川ヨリ湯瀬間（又ハ柄崎）

第二區　湯瀬ヨリ江舟川金屏渓ノ径ヲ重箱岩間

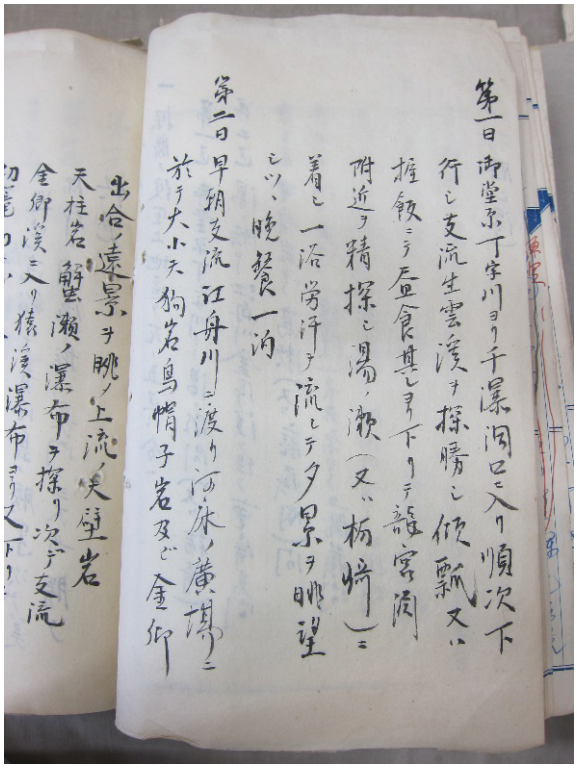
第三區　重箱岩ヨリ高瀬（又ハ藤藏）間

第四區　佐々並川（蓮渓）長者原ヨリ藤藏間

第五區　高瀬（又ハ藤藏）ヨリ阿武川下リ柳間

二、全日程ヲ探勝セントスレバ数日ヲ要スれど普通三日間

（若シ時間ノ余裕ナキモノハ第一區ヲ半日第二、三區間ヲ半日ニ探勝シ得）



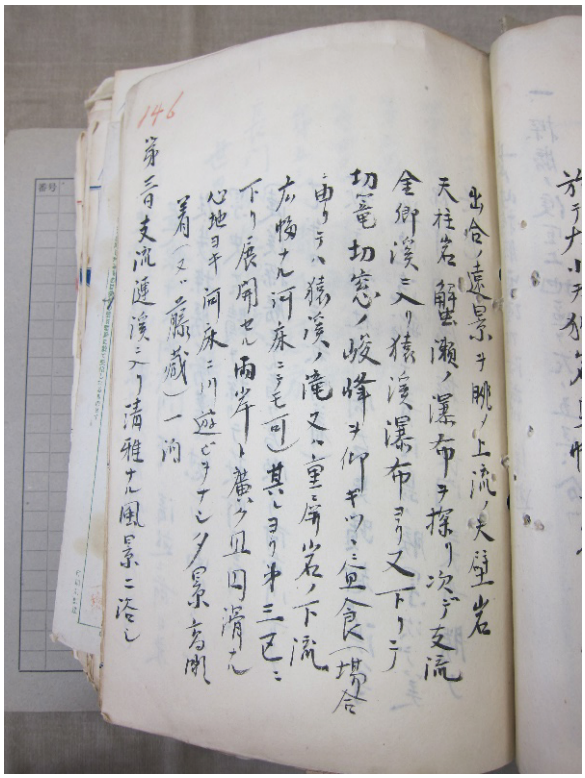
第一日　御堂原丁字川ヨリ千渓間ニ入リ順次下行シ支流生雲渓ヲ探勝シ仮飯又ハ握飯ニテ昼食其ヨリ下リテ誕宮間附近ヲ精探シ湯瀬（又ハ柄崎）ニ着シ一浴労汗ヲ流シテ夕景ヲ眺望シツヽ晩餐一泊

第二日　早朝支流江舟川ニ渡リ河床ノ廣漠ニ於テ大小大小ノ狗岩鳥帽子岩及ビ金仰

出合ノ遠景ヲ眺ノ上流ノ夫壁岩

天柱岩　鮮瀬ノ瀑布ヲ探リ次デ支流

金御渓ニ入リ猿渓瀑布ヲ又下リテ



出合ノ遠景ヲ眺ノ上流ノ夫壁岩

天柱岩　鮮瀬ノ瀑布ヲ探リ次デ支流

金御渓ニ入リ猿渓瀑布ヲ又下リテ

切竜　切窓ノ峻峰ヲ仰ギツヽ重食（場合

ニヨリテハ猿渓ノ滝又ハ重箱岩ノ下流

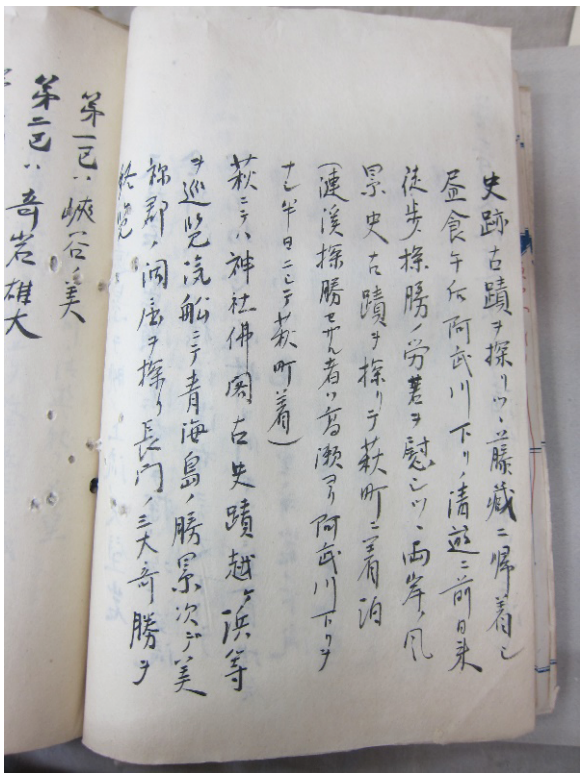
方幽ナル河床ニテモ可）其ヨリ半三区ニ

下リ辰剛ヶ淵岸ト廣ク且回遊ス

ル地ヨリ河床ニ川遊ビヲナシ夕景ヲ眺

着（又ハ藤藏）一泊

第三日　支流蓮渓ニ入リ清雅ナル風景ニ浴シ



史跡ヲ探リツヽ藤藏ニ帰着シ

昼食ヲ仮阿武川下リ清遊ニ前日来

徒歩探勝ノ労苦ヲ慰シツヽ両岸ノ風

景史蹟ヲ探リテ萩町ニ着泊

（蓮渓探勝セザル者ハ高瀬ヨリ阿武川下リヲ

ナシ半日ニシテ萩町着）

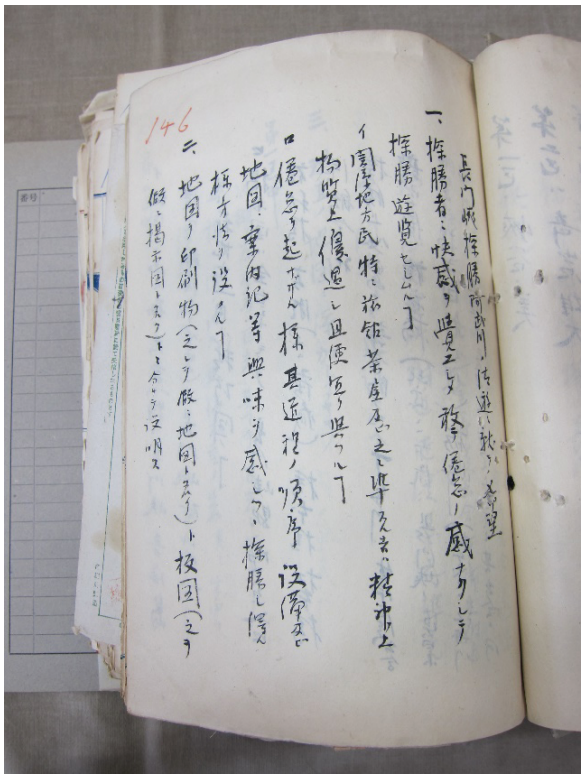
萩ニハ神社仏閣古史蹟越ヶ浜等

ヲ巡覧シ遊船ニテ青海島ノ勝景次デ美

祢郡ノ岡庵ヲ探リ長門ノ三大奇勝ヲ

第一区ハ峡谷ノ美

第二区ハ奇岩雄大



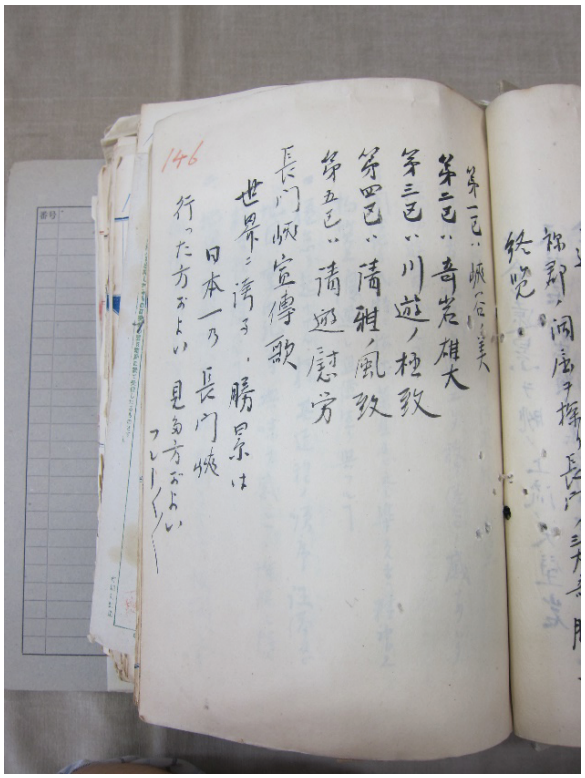
146

長門峡保勝会ノ任務ハ秋ノ希望
終覧

第一ニハ峡谷ノ美
第二ニハ奇岩雄大
第三ニハ川遊ノ極致
第四ニハ清雅ノ風致
第五ニハ清遊慰労

長門峡宣傳歌

世界ニ誇ス、勝景ハ
日本一ノ長門峡
行った方がよい　見る方がよい
フレー〳〵



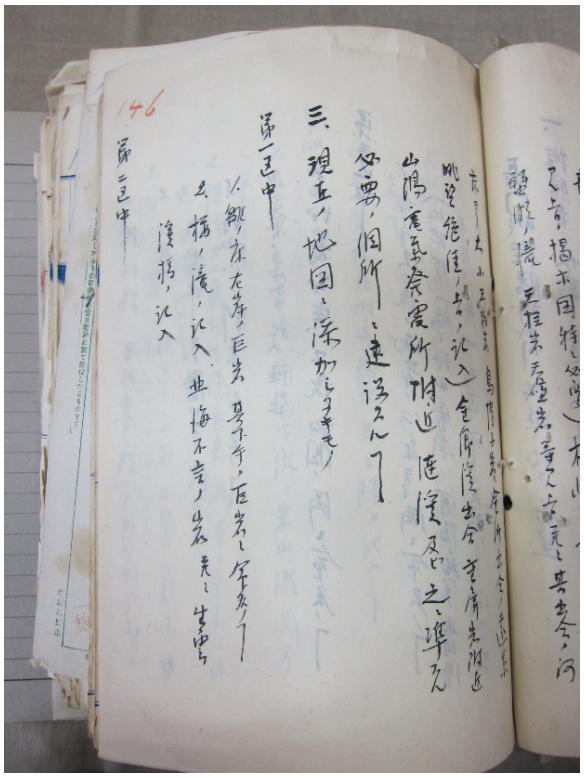
146

一、保勝者ニ快感ヲ與フル設備ノ感ヲシテ
保勝遊覧セシム

イ 周囲地方民特ニ旅館茶屋ニ之ニ準ズル者ハ特ニ
物質上優遇シ且便宜ヲ與フル

ロ 優遇ヲ受ケザル保勝者ハ其近接ノ場所ニ設備ス
地図、案内記等興味ヲ感シテ保勝シ得ル
様ナル設ケヲ

二、地図ノ印刷物（之ヲ仮ニ地図ト云フ）ト校図（之ヲ
仮ニ掲示図ト云フ）ト合ス江川ス

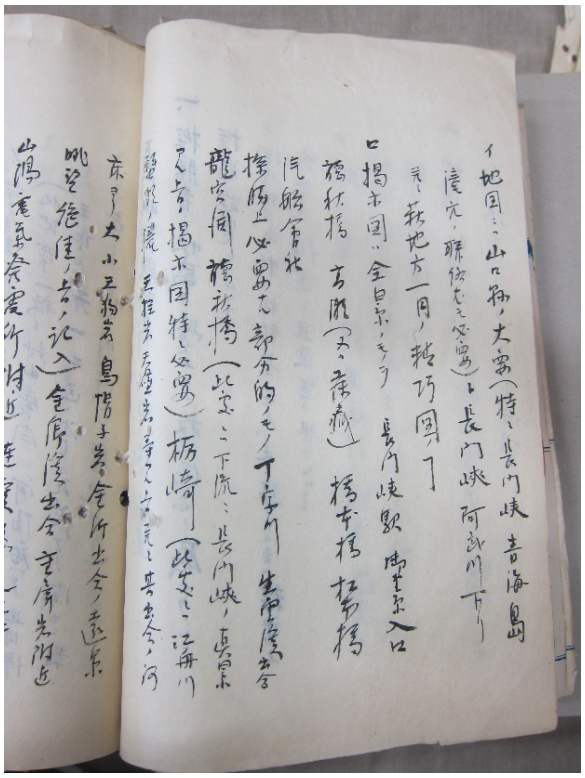


146

又方ハ掲示図特ニ必要ナル部分的ノモノ丁字ノ生命度ヲ含
ル竜宮岡、橋杭橋（此ノ下流ニ長門峡ノ真景ト
又方ハ掲示図特ニ必要）柄崎（此ノ上ニ江舟川
懸崖ノ景　主任ノ意見ヲ入ル又ハ共ニ会ノ河

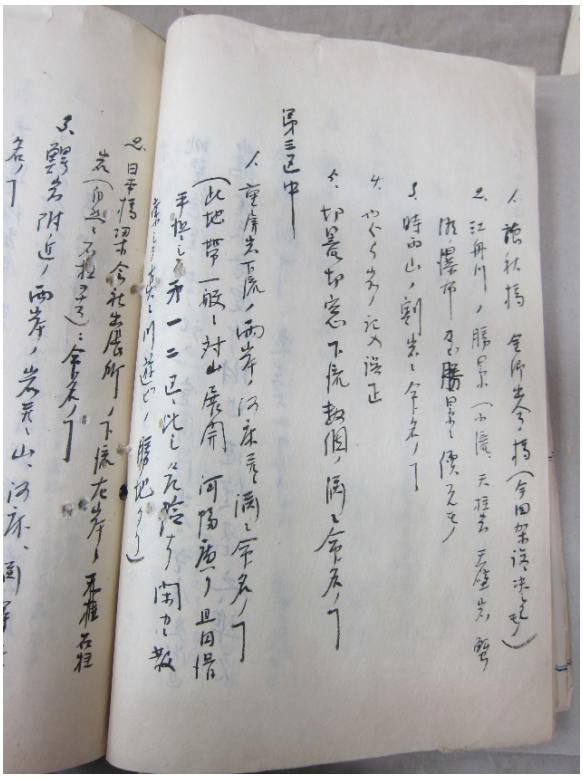
東ノ大山王神社　鳥居ノ前金所出会ノ近景
眺望絶佳ノ点ノ記入　金庫陰出会　主席ノ附近
山陽鉄道会社支所附近　陰陽及ビ之ニ準ズル
必要ノ個所ニ速設スル

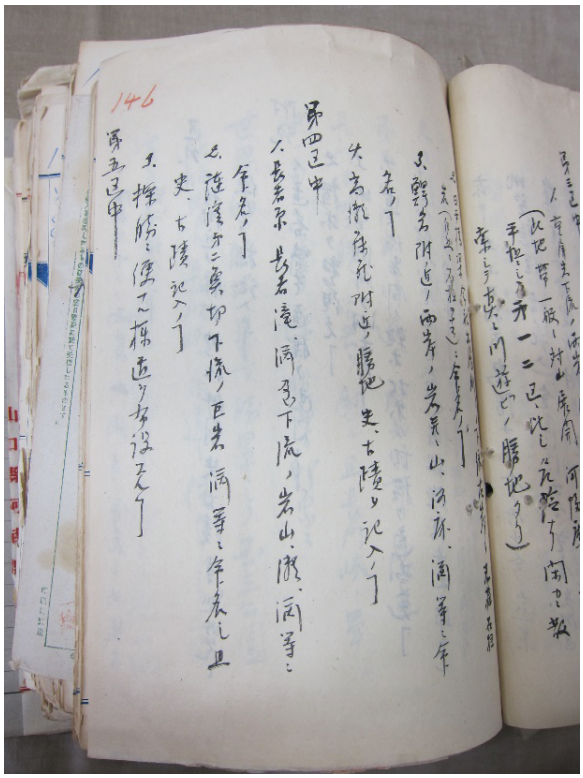
三、現在ノ地図ニ添加シテ
第一ニ中
イ 郷ノ東北部ノ巨岩　琴平ノ巨岩ノ
ロ 橋ノ滝ノ記入　世海不吉ノ岩ノ生ル
陰橋ノ記入

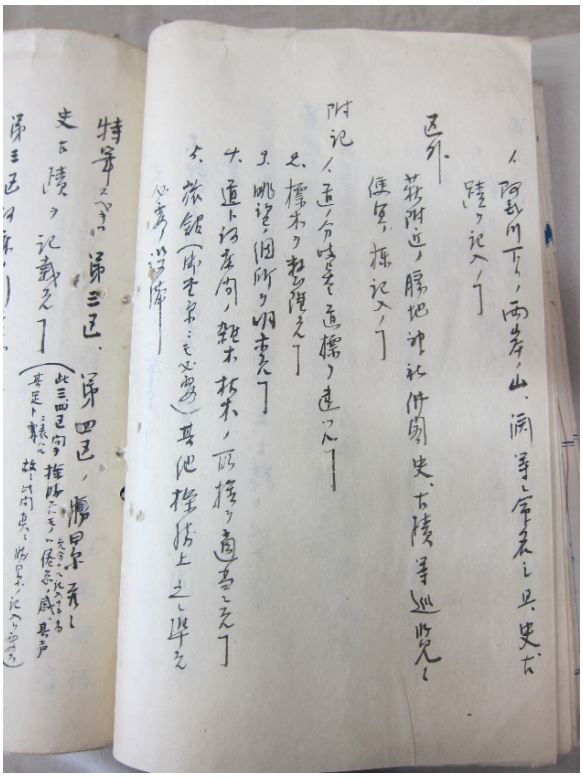


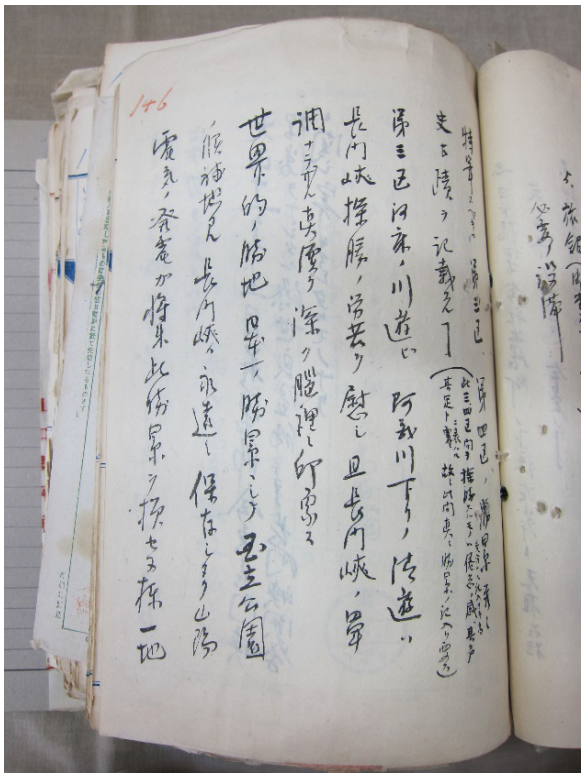
イ 地図ニ山ノ形ノ大要（特ニ長門峡　青海島
陰穴ノ所ノ必要）ト長門峡　阿武川下リ
ニ萩地方一円ノ結巧図ヲ
ロ 掲示図ニ全景ニシテ　長門峡駅　阿武川入口
橋杭橋　方形（又ハ扇形）　柄崎橋
汽船停泊
保勝上必要ナル部分的ノモノ丁字ノ生命度ヲ含
竜宮岡　橋杭橋（此ノ下流ニ長門峡ノ真景ト
又方ハ掲示図特ニ必要）　柄崎（此ノ上ニ江舟川
懸崖ノ景　主任ノ意見ヲ入ル又ハ共ニ会ノ河

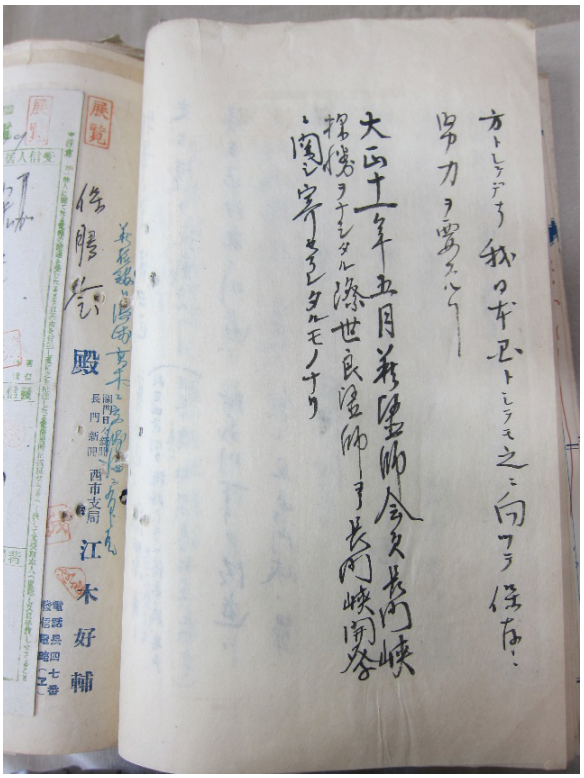
東ノ大山王神社　鳥居ノ前金所出会ノ近景
眺望絶佳ノ点ノ記入　金庫陰出会　主席ノ附近
山陽鉄道会社支所附近　陰陽











謝辞

最後になりましたが、この場を借りて資料の翻刻などに協力していただいた萩博物館の学芸員、平岡崇氏に厚く御礼申し上げます。

参考文献

「山口県の文化財」（https://bunkazai.pref.yamaguchi.lg.jp/）二〇二一年十二月十六日閲覧

金折裕司・廣瀬健太「“長門峡”と高島北海」『応用地質』，第五十巻，第五号、二九五～三〇四頁　一般社団法人日本応用地質学会　二〇〇九年

吉田初三郎『長門峡鳥瞰図』長門峡管理組合　一九二五年
（国立国会図書館デジタルコレクションよりhttps://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/920244　二〇二一年十二月閲覧）